『保健医療社会学論考』模擬査読結果報告（模擬！）ｂｙ乙査読者

論文名　「家族による『認知症』の構築―『認知症』カテゴリーに基づくトラブル修復―」

査読チェックリスト

１。テーマは本誌に適していますか	適	不適
２。目的は明確に書かれていますか	適	不適
３。研究方法とデータ処理（統計処理を含む）は適切ですか	適	不適
４。結果は適切に提示されていますか	適	不適
５。考察は適切になされていますか	適	不適
６。表題は内容を適切に表現していますか	適	不適
７。論文の構成と長さは適切ですか	適	不適
８。文章表現は適切ですか	適	不適
９。概念・用語の用い方は適切ですか	適	不適
10。図表の体裁は整っていますか	適	不適
11。英文表題・抄録は適切ですか	適	不適
12。キーワードは適切に選ばれていますか	適	不適
13。引用文献は適切に選ばれていますか	適	不適
14。その他、不適切な点	有	無

判定結果（○印）

Ａ．掲載可（ごく僅かな修正の場合を含む）

Ｂ．少しの修正で掲載可（再査読不要）

Ｃ．大幅な修正が必要（掲載の可否は再査読後に決定）

Ｄ．掲載不可

Ｅ．題材、内容が『保健医療社会学論考』（架空雑誌）の掲載論文として適切でない

査読者氏名

（匿名版のため、記載省略）

査読年月日　2010 年 8 月 31 日

『保健医療社会学論考』査読結果報告（乙査読者）

論文名「家族による『認知症』の構築―『認知症』カテゴリーに基づくトラブル修復―」

査読コメント

A）総論

各学的立場ごとに知的生産の様式は異なる。投稿者の立場は尊重されなければならない。投稿者の立場と査読者の立場が違っている場合には、原則として、投稿者のよって立つ学的立場における標準的水準を基準に査読判定はなされるべきだろう。その前提は了解しているが、それでもなお、当学会機関誌としては、以下のような判定となる。その理由を少しく詳しく説明するところからコメントをはじめよう。

社会構築主義の場合、評者のみるところ、構築がないと思われている場所に構築を発見すること、選択肢がないと思われている場所に選択肢を発見すること、これらだけで知的生産性を確保できた（と主張できた）ため、かつては、実証（例示）の精密さの水準が比較的甘いものも、研究論文として許容されてきた。そういう歴史は認めよう。

しかし、それは、社会構築主義の議論があまり知られていない時代の話である。近年では、社会構築主義的思考自身は、人口に膾炙してしまっており、かつて許されていた水準に甘んじることは許されないだろう。

したがって、2010 年秋の現在、具体的な対象（レファレンス）を持つ社会構築主義論文は、以前の（１０年前や２０年前）の論文が持っていたあいまいさを乗り越えていなければ、その知的生産性を十全なものとしては評価されないことになると思う。

そういう観点から本投稿論文を見てみると、「秀作」ではあるが「習作」でもある、という感想を持たざるを得なかった。この「ゆるさ」は、改善されるべきである。たしかに、観察は周到になされているようである。インタビューの回数も多く、フィールドノーツもシステマティックに取られている。この点（観察部分）は、質的研究の標準的水準を超えている。けれども、議論の精密さが不足している。考えなければならない部分が考えられていない。社会構築主義というプログラムの可能性や面白さを提起する教科書の中の記述なら、このような「ゆるさ」も許されるかもしれないが、学会の機関誌に掲載する学術論文としては、問題があるように思われた。

B）個別評

○タイトルについて

本論文の「ゆるさ」が、もっとも典型的に表れているのは、「タイトル」部である。何重にも重なった不適切さがあるように思われる。それを重要な順に３点確認していきたい。

まず第１点目の不適切さは、日本語のメインタイトルの出だしの「家族による」の部分である。事例のほとんどは、　認知症の家族会（セルフヘルプグループ）内でのコミュニケーション場面である。家族会のミーティングで、認知症に関する家族の語りが、先輩たちによって修正されたケースを「家族による『認知症』の構築」と呼ぶことは不適ではないだろうか。「ｘｘによる」という表現が、ｘｘに能動的な主体性を当てはめている表現だとするのならば、この「ｘｘ」にはいるべきなのは、むしろ「家族会の先輩たち」なのではないだろうか。あるいは、相互行為というものが、働きかけ手だけではなく、働きかけの受け手によっても共同達成されていると考えるのならば、「ｘｘ」にはいるべきは「家族会場面」や「診療場面」ではないだろうか。

もしメインタイトル末尾が「構築」ではなくて「トラブル修復」ならば、「ｘｘ」に「家族」が入ることに妥当性を認めることができるかも知れない。しかし、投稿者は、「構築」の主体を「ｘｘ」におこう、としているのだから、そのような理解でこの問題を逃れることはできないだろう。

もう一つの問題は、英文タイトルの状況から見て取れる。英文タイトルは、「Construction of ‘ ’ Dementia ’ ’ by Family: ‘ ’ Dementia ’ ’ as Category in Action」となっており、トラブル修復に関する記載が、メインタイトルにもサブタイトルにも見えない。たしかに、和文タイトルの直訳を英文タイトルとしなければならない取り決めはない。私（評者乙）が問題としているのは、したがって、和文タイトルと英文タイトルの食い違いではない。そうではなくて、本文のほとんどが「トラブル修復」にかかわる議論になってしまっているのに、そのことが英文タイトルにおいて触れられていないことからみえる「ゆるさ」に注目したいのだ。この「ゆるさ」は、本論文における知的生産のポイントを、投稿者が厳密に考えていないことを意味しているのではないだろうか。構築主義的主張に好適な事例がたくさんあるので、それを呈示するだけで、知的生産になるだろう、と考えて論文を書いてしまっているのではないだろうか。総評にも記したように、日本の社会構築主義の現下の水準は、そのような「ゆるさ」を許さない水準に達していると評者は考えている。「トラブル修復」という会話分析由来の用語を英文タイトルに載せるのには、気後れがあったのかもしれないが、そういう水準で勝負するしかないという諦念が、和文タイトルにあったのなら、英文タイトルでもその諦念を維持すべきだったのではないか。自分の論文の勝負どころをどこに設定するか、という戦略性において若干、安定性に欠けるところがあったのではないか、と思われた。その不安定性が、この英文タイトルにおける欠落に表れているように思われた。

○事例の解釈について

さいごに例２の事例の解釈に触れておきたい。ここにもまた「ゆるさ」の事例として指摘できる点があるだろう。投稿者は、5 頁５行目以降で、例 2 の事例をまとめて、「ここでは、『私ら（＝介護者＆要介護者）は鏡みたい』という「鏡のメタファー」に則り、

要介護者の変化がＬさんに帰責される」（『』はもとは「」。評者による改変）と述べる。しかし、これは、事例のとりまとめとして、読者には納得しがたいものだ。（事実がそうであったとしても、例示の仕方からそのように受け取ることが困難ならば、やはり論述としては問題があることになる。）

事例では、不安そうな顔をしている認知症の夫に対して怒鳴った妻Ｌが、家族会の場面において、「たまの外出で不安だったのは夫ではなく、むしろＬさんの方だろう」という指摘が、家族会メンバーのＭさんからなされている。このＭさんの指摘時点では、元々の不安はＬさんにあり、鏡的にそれを写しているのは、認知症の夫の方である。それを、『私ら』と複数形でまとめ直すことには、少なくとも説明が必要なはずだ。たしかに、フィールドノーツにも「私らが、鏡みたいになってるんですよ。私ら健常者にしたら何でもないことが、向こうにしたら、ものすごい不安になるんですよ」（5 頁）という記述があり、鏡となるものが、複数であることはデータに基づく理解であるようにも思われるが、その一方で、そのフィールドノーツの記述は「私ら健常者にしたら」という部分を含んでおり、「私ら」が（＝介護者＆要介護者）という内容であることを支持しないデータにもなっているのである。

つまり、事例そのものは、鏡が単数であることを指し示しており、フィールドノーツは、鏡は複数だけれども、健常者の複数の鏡であることを指しているようであり、その先行する２者がともに、「私ら」が（＝介護者＆要介護者）という内容であることを支持しないデータになっているのである。この一貫性を読み取りがたい記述の連鎖をそのままに、論述を進められても読者はなかなかついて行けない。もちろん、投稿者の解釈をサポートする事実はあるのだろう。けれども、論文を書くということは、「事実はこうだ」という事実部分だけで勝負することではなく、「このデータからはこうなるのは当然ですね」という推論提示部分でも勝負することだと思う。つまり『選択すべきデータを適切に選択するとこうなる』という形で呈示することにここは失敗しているのではないだろうか。再考して欲しい。

ところで、トラブルを修復する責任と、原因の帰責、という考え方は直結していないようにも思われた。「帰責」ということばの含意をすこしずつずらして用いることで、論証できていないことをできているかのように示しているようにも思われた。つぎの投稿ではこの部分も再検討をしてみてもらいたい。

○まとめ

上記のように不満はあるものの、全体としての印象は、すがすがしい。こういう福祉っぽいネタは、しばしば「当事者の人権尊重志向」や「福祉志向」で汚染された書き方がなされ、そのような「主張」が「論証」の曖昧さ・不十分さを補いうるかのような書き方がされてしまうものだが、本投稿論文には、そのような甘えが全く見えない。徹頭徹尾社会学に徹して議論をしようとしている点には、好感を覚えた。その志向を徹底し、学問を高めていってもらいたい。以下、誤植と思われた部分を指摘するが、評者の勘違いによる指摘もあるかもしれない。納得した部分を直して頂ければ幸いである。

＝誤植と思われる部分、あるいは、訂正が検討されてよいと思われる部分＝

（1）2 頁 2 行目

×　高齢者」と、

↓

○　高齢者」として、

（2）４頁 21 行目

×　「昔から口が他者」

↓

○　「昔から口が達者」

（3）5 頁 16 行目

×介護者に帰責させている

↓

○介護者にトラブルの原因を帰責させている

（4）6 頁 4 行目

×想定

↓

推論（※想定だと、あらかじめ決まっている前提に聞こえる。推論、想定、推測、あたりの用語法は、再検討が必要のように思われた）

（5）１２頁１０行目

×強い責任

↓

○重い責任

※強い責任感、はあり得るが、強い責任は、どうだろうか。